

ふらっと旧東海道

天竜川駅～浜松宿～高塚駅12kmを歩く

4月24日友夫婦と旧東海道を歩いた、先回の続きで高塚駅から浜松宿とその先の天竜川の手前までを計画した。

東海道線の駅に思う

天気予報は晴れのち曇りで歩くには丁度よい日を選んだ。例によって7.07"の区間快速に乗り大府で乗り換える新快速は超満員だ、でも刈谷で半分は降りて楽に座れるつもりだった。しかし、今日は立っている人が降りただけで席は空かず予想外であった。それでも安城では座ることが出来た、JR東海道線の最近はいくつかの変化が見られる。大高と刈谷市では2.3の駅が新設されたが、安城岡崎では郊外の発展が進むものの今までどおりなのだ。

地域の発展と鉄道の有効利用は欠かせない、いくら道路を整備しても追いつかないし大量輸送には向いていない。ひとつの市町村ではなく、もっと広域で交通網を考えることが必要と思う。そのことがひいては経済の発展を支える、でも何故そうした提言がされないのだろうか？ 一つの市や町の単位が小さすぎることもあるのだろう。みんな自分の所ばかり考えていて、自分達が発展するために何をなすべきか真剣に考えていないとしか思えないのだが.....。

豊橋着8.13"次の掛川行きは降りたホームではなく、隣のホームへ移動しなくてはいけない。老人にとってホームの階段の昇り降りはとても負担になる、これもおかしなことだ、利用者本位に考えれば到着ホームの反対側ホームで乗り継ぎが出来るべきだ。

おそらく運転区間毎にホームを決めているようだ、でもちょっと冷静に考えればだれでも分かることだ。この原因は中長距離はたくさんもうかる新幹線を利用してという、新幹線中心主義で在来線は二の次にされていることだ。ほんとに便利で使いやすいJRになって欲しいのに.....。

安産の神様「木花咲耶姫命」

浜松のランドマーク「アクトタワー(45階 212m)」がそびえる浜松駅を過ぎると、次が天竜川駅だ。小さな駅に降りて9.10"スタートする、東海道は100m程先で途中にローマ字でハマカンと書かれた観光バスが道をふさぐように止まっていた。現在は国道152号の旧東海道に出ると交差点の角に六所神社があり、そこを左折して進む。宿場マップを見ながらまずは浜松アリーナをめざす。



天竜川駅前

5分ほど歩くと名残の松が数本残っていた、ここが旧東海道だった証でもある。そして、通りの家の庭には剪定された太くて立派な榎の木が印象的だった。9.30"浜松アリーナの前に来た、とても大きな規模の体育施設のようだった。入り口はバス停でその前には遠く浜松城を描いた、歌川広重の浜松宿の絵が緑の木立の下にあった。そこから10分程で子安神社に着き立ち寄ってみた。この御祭神は地元の伊久智神社と同じ「木花咲耶姫命」だった、つまり安産の神

様ということである。当地の庄屋伊藤家の祖先が寛永12年(1635)に家の守護神としたことに始まる。伝説では源範頼が娘の無事出産を願って創建したと言われている。戦前までは4月3.4日がお祭りで、安産祈願のお腹帯を借りた母親がお礼に紅い旗を奉納した。今も甘酒がふるまわれて、これを頂くとお乳がよく出ると言われている。本殿の隣には子安町の屋台置き場(山車蔵)が建てられていた。



子安神社



浜松市内へ

馬込一里塚跡は見つからず

神社を出ると直に芳川の琵琶橋を渡る、すると右手蒲神明宮の参道入り口に大きな「神明の鳥居」がある、石ではないので叩いてみると銅板が巻いてあった。

さらに10分程進むと左手にNTTのアンテナが見えて、右には臨済宗竜梅禅寺の石柱と門がある。この寺は享保5年(1730)12月、浜松城主だった松平信祝(のぶとき)の娘が東海道の旅中に急病でなくなり、この寺に葬られたという。

そして、宿場マップでは最初のトイレマークのついた浜松東警察署の前を通り、馬込一里塚を探しながら進んだが見当たらない。完全に通り過ぎてははずの馬込橋まで来てもなかった。丁度一人のおばあちゃんがいたので聞いてみたが知らないと言う。そこで警察署まで戻って確認したが、警察署の隣にあるはずの一里塚は見つからなかった。きっと復興整備がされていないのだろう、それにしても一里塚跡の看板くらいは立てて欲しいものだ。

馬込橋を渡ると浜松東番所跡がありここから浜松宿に入る、しかし、その番所跡も分らずに交差点を渡るとビルが建ち並び右手に夢告地藏尊がある。このお地藏さんは江戸時代末期に流行したコレラで亡くなった人々の霊を祭るために建立された。

廃仏毀釈で土に埋められたが、町民の夢枕に出て助けを求め、掘り出されてお堂に安置されたという逸話が残る。

人口80万人の政令指定都市「浜松」

浜松のランドマークであるアクトタワーを左真横に見ながら進むと、目の前に9階建てのお菓子の調理学校のビルがある。東海調理製菓専門学校「ミズモト学園」の看板が目立つ、さらに交差点を渡り振り返ったら、ケーキ屋さんと思ったビルも同じ学校の学生会館だった。たしかに窓からは白い帽子を被った生徒達の姿が大勢見えた。さらに進んだ右手にも調理学校の建物はあった、かなりの規模で運営されているようで驚いた。ここから少し先の交差点で東海道は左に曲がる、われわれは右に曲がって500m程先の浜松城へ向かう。次の交差点の地下道で反対側に渡ると浜松市役所で、正面玄関への道はきれいな花で飾られていた。四角いビルは名古屋の市役所に比べればこじんまりとしている、政令指定都市とは道府県と同じような行財政権限を持つ都市のことで、17都市ある。解説では道府県機能と大都市機能を調整するために創られた制度とある。したがってベターには違いないがこれがベストなのかどうかは別のようだ、となれば道州制みたいな広域自治が実現した時には今と同じでよいのだろうか。組織的には現在でも屋上屋を重ねているわけだし、力のある所だけは別運営するなら国土の均衡ある発展はどうなるのだろうか、今の県単位では問題の多いことは分かるが。

家康が苦難の時代をすこす浜松城

後には出世城と言われる

市役所の隣、元城小学校の手前で左折して市役所横の緑に覆われた坂道を上ると浜松城公園入り口に着く。時間は丁度11.00、道は二手に分かれ浜松城と矢印の案内板があるも、とても分かりにくい矢印で、どちらへ行けばよいのかよく分からない。たいした違いはなかろうと左手の道を進むと、石段を登ったところに石垣が現われる。これは家康が築城した頃の面影を残す貴重なものという、自然石を上下に組み合わせで積み上げる「野面積み」で、表面にはすき間があり一見くずれやすそうに見えるが、奥が深く内側に小石や砂利を詰めてあるため、水はけもよいという。



野面積みの石垣



浜松城

浜松城は家康が19歳～45歳の頃、今川、武田、織田などの強大な戦国大名に囲まれて戦い生き延びて、そして天下盗りの夢をつかんだ場所。生国の岡崎を離れ、駿府の今川家で送った人質生活、青年期に織田家と同盟を結び、岡崎から西遠までを支配下におさめ、着実に力をつけ耐えがたきを耐えて徳川300年の礎を築いた。

その家康の生涯最大の敗戦は元龜3年(1572)の三方が原の合戦で、南下してきた武田軍2万7千に対し徳川軍は1万2千。天下に名のとどろく武田騎馬軍団に多勢に無勢。無残に敗走し命からがら城に逃げ帰ったが、その途中ではあちこちに隠れ村人の助けにより無事だったという伝説を残している。

しかし、家康が天下を統一してからは駿府に入城し、浜松城は家康ゆかりの譜代大名が城主となりました。概ね5万石前後で25代の城主が誕生し、老中に5人、大阪城代2人、京都所司代2人、寺社奉行に4人が登用され「浜松城は出世城」と言われた。特に有名な城主は天保の改革で知られる水野忠邦がいる、彼は唐津藩主時代に願い出て浜松藩主になった。

ボランティアガイドの説明で天主閣の見学

150円の入場料を払うと隣に「ボランティアガイド無料」の看板が目についた、早速お願いしたところ出払っているみたいだった。が、直にひとりのおばちゃん came くれた。「中田さん」でブルーのハッピーを着て落ち着いた口調で自己紹介の後1階から2階、3階と案内してくれた。

最初に浜松城の生い立ちを説明してくれた、お城は三方が原の延長上にある台地の端に位置している。最初は今の位置ではなくて、浜松城公園前の国道の向かい側に現在は東照宮になっている「引馬城(ひくまじょう)」があった。その隣に規模の大きい城を家康の命を受けた木原吉次が中心になって築いた。野面積みの石垣が残っていること、戦では飲み水が生死を左右するので、城内の井戸に関する情報は極秘だった。そのため資料はなく詳しいことは分からないけれど、城内に10本の井戸があり天主台地下にも井戸があったという。その井戸が再現されていたが、50mの台地なのでどれくらい深い井戸だったのだろう。歴代城主の年表や、家康の二人の正室(築山御前とその死後秀吉の異父妹の朝日姫と政略結婚させられた)と15人の側室、その子供四男一女の経歴がまとめられていた。三男長松が後に二代将軍秀忠となり、四男於次は尾張清洲城主の忠吉となる。このあと3階の展望台から富士山は眺められなかったが、三方が原、犀ヶ原古戦場の方角など説明してくれた。



ボランティアガイドの中田さん

今の浜松にはたくさんのビルの中にアクトタワーがそびえる風景が広がっていた。最後に家康の母於大の里東浦を宣伝し、ボランティアガイドを立ち上げたので一度足を運んでくださいと伝えて別れた。

ランチは大衆食堂で

市役所の裏手を通って大通りに出ると「家康鎧架けの松」がある、小さな松で三代目としてある。地下道をくぐり反対側に出ると目の前に食堂があり、天婦羅、ハムエッグ、魚のフライ、シラスおろしなどのメニューが書き出してある。最近では珍しい大衆食堂だ、時間は12時を1.2分過ぎたところでタイミングもよいので暖簾をくぐった。店内に入ると正面のガラスケースに数種類のご馳走が皿に盛られて並んでいる、カフェテリア方式というやつで客は好みのご馳走をとることができる。私はハムエッグとシラスおろしをとり席に着いた、すると間髪をいれずにご飯と赤だしが運ばれた。妻は煮魚とサラダにもずくをとり席に着いた、すると女性には「ご飯は大盛りですか、それとも小盛りにしますか」と聞いていた。これもサービスの内か、そして、われわれがご馳走をとるとすぐに同じご馳走が並べられていた。定食ではなく好きなご馳走を選んで食べられるのはいい、家庭の食事という雰囲気もある。しばらくすると市役所勤務の人たちだろうか、大勢の人が入ってきて店内は満席になった。

六つの本陣があった浜松宿

食事を終えて旧東海道まで戻ると大手門跡の説明板があった、この門からお城までは庶民は入ることは出来なかった。ここから先に宿場が広がっていたわけで、進んで行くと佐藤本陣跡、梅屋本陣跡の説明板が次々と現われる。道の反対側には杉浦本陣跡川口本陣跡がある、最も古い杉浦家の本陣跡は建坪272坪もあった。そして、国学者の賀茂真淵は梅屋の婿養子であったという。

本陣6、旅籠94と東海道最大規模の宿場で、本陣が6軒あるのは箱根宿と浜松宿の二つといわれている。ここ浜松宿は家康が浜松城を築き、引間から浜松と地名を改め、城下町と宿場町を合わせた町に整備した。しかし、太平洋戦争で町のほとんどは焼けてしまったため、現存するものはないのが寂しい。

賀茂真淵は浜松の人

成子坂で右折してしばらくすると子育て地藏尊霊場がある、ファーストフード「デニーズ」の前で変則の交差点になっている。赤い前掛けをしたお地藏さんが数体並んで、きちんと屋根が付けられている。でも何故霊場と言うのかな？ 霊場とは人間の魂が集まるとされる場のことで、古くから信仰の対象になっている恐山、比叡山、高野山などだ。ほかには山岳信仰もあれば、歴史的な戦争が行われた戦場の跡なども霊場の扱いを受ける。説明板があったようだが気付かず帰ってから写真を見て分かった。東海道はここを左折して進むが、真っ直ぐ行くと賀茂真淵記念館がある。彼は浜松に生まれ八代将軍吉宗の次男田安宗武に仕えた、万葉集を研究し万葉風の和歌を復興さ

せ「国学の四大人」の一人として称えられている。記念館横の縣居神社には「大御田のみなわもひぢもかきたれてとるや早苗はわが君のため」の歌碑がある。記念館へは寄らずに真っ直ぐ進むと東海道線と新幹線の高架をくぐる、この辺りは「八丁畷」といい昔は何もなかった所だ。その地名のラーメン屋の看板があったが店はかなり以前に廃業したようだった。次は鎧橋をめざして八丁畷を進む、今は大きなショッピングセンターもあるにぎやかな通りだ。13.13" 鎧橋に着いた、何故鎧橋の名があるのか、説明板には平安時代末期比叡山の僧兵が鴨江寺を攻めた時、寺側の軍兵がこの辺り一帯に水を張り鎧を着て、この橋を守り固めて戦ったことから「鎧橋」と称したとある。でも戦ではみな鎧を着て戦ったと思うので、あちこちに鎧橋がありそうな気がするのだが.....。

若林一里塚と二つ御堂

鎧橋から4分も歩くと若林一里塚跡に着いた、残念ながら塚はなくて石碑と説明板のみだった。ここは江戸より六十六里にあたり、昔は土手のある松並木が続く八丁畷だったとある。この先で街道はふた手に別れるが東海道は右へ進む、その交差点の所にいろいろなものがあった。二つ御堂、高札場跡、馬頭観音で、二つ御堂は道を挟んで南北に同じようなお堂が建っている。珍しく手書きの説明板できれいな文字が並んでいた、それによると奥州平泉の藤原秀衝公と、その愛妾によって天治年間(1125年頃)に創建されたと伝えられている。京に向かっている秀衝公が大病であると聞いた愛妾は、京へ上る途中ここで飛脚より秀衝公死去の知らせを聞き、その菩提を弔うために北のお堂を建てたという。一方、京の秀衝公は病が回復し帰国の途中ここでその話を聞き、愛妾への感謝を込めて南のお堂を建てたという。



二つ御堂

美しいお話ではあるがその真意の程は分からない、現在の北堂は阿弥陀如来、地蔵菩薩毘沙門天が、そして南堂には薬師如来、不動明王、大日如来が祀られている。でも何故こんなにたくさんの仏様が祀られているのだろう、これも分からない。

喫茶店は見当たらない

ここからは一部に松並木が残って街道の名残をとどめている旧可美村を歩く、昔全トヨタ労連で可美村の村会議員候補の推薦を決めたことを思い出す。あの可美村は浜松市になって発展している、あれから30年余も経過したのだ。途中には合併を記念しての石碑や公園が造られていた。そして、珍しいものを見つけた、普通の民家の門柱に「株式会社 大一織布」の門灯が残っていた。綿織物の中心地だった東浦の、生路や藤江の機屋の機械修理は浜松から職人が来ていたと聞いている。この辺りにそうした機屋さんがいたのだろう。

高塚駅までは3km程の所まで来ておりコーヒータイムにしようと思茶店を探すが、でもなかなか見当たらない。喫茶店の多い愛知県のようにはいかない、そんな時「茶房」という看板が見えた。街道からすぐだったので行ってみると、営業中にはなっているが暖簾は出ておらず、玄関のドアはロックされていた。がっかりである、でも眼と鼻の先に可美公園・総合センターの立派な建物があった、喫茶コーナーがあるかもしれず立ち寄った。入り口を入ると左側に体育館、右手は事務管理室などで期待に反して喫茶コーナーはな

かった。中央の広いロビーの洒落たイスに腰を下ろすと、飲食禁止の張り紙があるので見回すと入り口横に自販機があった。自販機を置いていながら飲食禁止はないだろうとよく見ると、自販機の前にイスが置いてあった。

13.55"自販機の前に移動してカプチーノを求め、腰を落ち着けお菓子をつまみながら休憩タイムにした。

高塚駅14.51"の電車で帰る

可美公園・総合センターを出て東海道を西へ進むと、秋葉常夜燈籠、高札場跡があった。その先の槇の木の垣根が続く通りで、ランドセルを背負った小さな子供達が不意に出てきて驚いた。見ると垣根の間に細い道が学校へと向かっているのだ、あまりにも小さな子供たちなので新一年生だろう。



可愛い子供たち

しばらく行くと「堀江領境界石」とした杭が建っていた、これは私領傍示杭といわれるもので宝永2年(1705)当時高塚村は堀江領となったが、増楽村以東は浜松領であったため領地の境界を示すために両村の境に標柱を建てた。杭の東が浜松領藩、西が堀江領であったという。このあと東海道脇に建つ熊野神社の鳥居をくぐって、高塚駅に14.45"到着した。ホームに張られている5月3日～5日の浜松祭り凧揚げのポスターを見て、14.51"の電車に乗り16.26"東浦駅に帰った。